に「がん登録部会」があり、メンバーに登録関係者（地域・院内）も入り、統計、データの分析・評価等についても検討していくこととしております。今後は、この部会が動き出すことによりがん登録がもっと意義をもつことになるものと思います。

また、今年度新たに、地域がん診療連携拠点病院に熊本労災病院、人吉総合病院が指定を受け院内がん登録を始める医療機関が増えることになります。このことが、地域がん登録の精度向上にも繋がることと思います。

終わりに

現在、報告書「熊本県のがん　－平成 15 年－」を作成中です。完成しましたら各地域がん登録室へも送付予定です。今後ともご指導、ご協力よろしくお願いします。

第 28 回国際がん登録学会（IACR）年次総会に参加して

松尾　恵太郎
愛知県がんセンター研究所　疫学・予防部

第 28 回 IACR 年次総会は、ブラジル　ゴイアス州の州都ゴイアニアにて 11 月 8 日から 10 日の 3 日間の日程で開催された。ゴイアニアはサンパウロから北北西に 800 キロ北、首都ブラジリアの西南西に 150 キロに位置する。日本からはなはだ遠い地であった。ゴイアス州には世界遺産ゴイアス歴史地区があり、18-19 世紀の植民地風の建築で知られているそうである。11 月のブラジルは、日本の春の終わりから夏の始まりの間のような、多少の肌寒さも残しつつ、太陽のまぶしさを感じるような穏やかな気候であった。（筆者は会場のあるホテル内にこもっていたため、その穏やかさを殆ど体験することが出来なかった。残念である。）

参加状況に関して詳細な報告は無かったが、およそ 200 名程度収容の会場を満席とする以上の参加があったように見受ける。当然であるが、南米の各国からの参加が多かった印象である。日本から現地入りした参加者は神奈川県立がんセンターの岡本直幸先生、放射線影響研究所（長崎）の早田みどり先生、大阪府立成人病センターの井岡亜希子先生、放射線影響研究所（広島）の片山博昭先生、西信雄先生、国立がんセンターの松田智大先生、丸亀知美先生、筆者の計 8 名であった。残念ながら国立がんセンターの味木和喜子先生はお仕事の都合で急遽ポスターのみのご参加であった。例年の日本からの参加状況に関する知識はないが、十分会場内でプレゼンスを発揮していた。

今回の年次総会のテーマは "Cancer and Environment" ということで、がん登録に関連するトピックのみならず、遺伝子多型等を用いた分析疫学的な検討まで幅広い内容の発表が行われていた。口演は 7 セッションに分かれ、職業と環境で 4 演題、放射線で 4 題、時間的傾向で 4 題、がんの地理学で 4 題、がん登録の方法論で 9 題、住民ベースのがんの生存で 6 題、食事と運動にて 3 題の計 34 演題が発表された。最初の五セッションでは演者の発表に先だって各トピックに関するキーノートレクチャーが行われた。このレクチャーは非常にコンパクトながら示唆に富むレビューがなされ、疫学研究に携わるものとして多くの示唆を得られた。個人的にはフィンランド Dr. Pukkala のがん登録データを用いた地理疫学的な検討に関するスライドが印象的であった。（参照 URL : http://www.cancerregistry.fi/eng/statistics/）特に禁煙に対する国家的な取組みと肺がんの罹患率の変動に関する地図の経年変動に関する動画は、禁煙の取組みの重要性に対するとてもインパクトの強いものであった。日本からの口演発表は、2 題であった。広島放影研の片山先生はがん登録の方法論のセッションにて、"Difficulties about the identification of individuals for the cancer registry in Japan" の演題にて、日本の漢字・ひらがな・カタカナの混在する状況下でのコンピューターによる個人照合の困難さに関して発表され、非常な好評を得ていた。筆者も愛知県がん登録データにおけるがん罹患後の予後に関する口演を行った。ポスターセッションには、92 演題の発表が行われた。全プレゼンテーション終了した 10 日午後にはビジネスミーティングが行われ IACR の今後の運営に関する説明があった。国際がん研究機関（IARC）と IACR との間の顛末など新参者の筆者

には把握しかねる部分も多かった。（この点に関しては理事の早田先生からのご報告があると思うのでこの稿では触れないこととする。）

筆者にとって初の IARC 参加であったが、これまでに参加された方から伺っていた通り、非常にフレンドリーなミーティングであった。開催国のお国柄も反映されていると思われるが、それを割り引いても参加しやすい会議の一つであろう。最終日ビジネスミーティング後の、ポスターアワードは純粋に面白かった。ポスタープレゼンテーションの中から、優秀やユニークな発表を、写真付きで紹介しながら表彰していくのであるが、デンマーク Dr. Storm の軽快な解説も相まってとても印象的であった。ちなみに放影研（広島）の西先生の社会経済要因とがん死亡、罹患と生存率に関するポスター発表は、優秀ポスター賞に選ばれた。連日、夕食を兼ねたパーティがあったが、ダンスが中心の非常にブラジルらしいものであった。（筆者はダンスに関して不調法であるため難儀したが）。何れにせよ、総会のみならず、それ以外の部分でも未参加の方にも是非参加をお勧めしたいと思うような会であった。2007 年の総会は、スロベニア共和国のリュブリャナにて 9 月 17-19 の日程で開催予定である（参照 URL（http://en.iacr2007.si/）、抄録の締め切りは 5 月 31 日）。さらに多くの方が参加されるよう期待する。

第 15 回地域がん登録全国協議会総会研究会ならびに実務者研修会を終えて

松田　徹

山形県立がん・生活習慣病センター　がん対策部

平成 18 年 8 月 31 日、9 月 1 日と、山形市・山形県庁で第 15 回地域がん登録全国協議会総会研究会ならびに実務者研修会をお世話させていただき、無事終了いたしましたことをご報告申し上げます。8 月 31 日の実務者研修会には 115 名、9 月 1 日の総会研究会には 140 名の方々の参加を賜り、心から御礼を申し上げます。出来るだけ行政主導の地域がん登録事業の実施を、との思いから会場は県庁とし、会場の設営や運営にも多くの県職員の応援を得て、無事に開催することができました。

今回の研究会では「がん対策におけるがん登録の役割」をテーマとして、がん対策において精度の高いがん登録が不可欠であることを、実際にがん対策に用いられた例を通してご紹介する内容にいたしました。

シンポジウムは、「がん対策におけるがん登録の意義・役割」とし、「疫学研究への利用と成果の還元」（西野善一先生・宮城県立がんセンター）、「拠点病院を中心とするがん医療体制の企画」（森脇 俊先生・大阪府健康福祉部）、「地理情報と地域がん登録資料を用いたがん罹患モニタリングの現状」（三上春夫先生・千葉県立がんセンター）、「がん検診の精度管理」（笠井英夫先生・岡山県医師会）のご講演をいただきました。がん対策上、地域がん登録が必要不可欠なものであることの確認が出来ました。

特別講演として国立がんセンターの祖父江友孝先生に「国家戦略としてのがん対策とがん登録の役割」についてご講演をいただきました。今後のわが国におけるがん対策の方針と、その中での地域がん登録の果たすべき役割をご教示いただきました。

ポスター演題は 10 題の応募があり、その中から国立がんセンター丸亀知美先生の「1993-2001 年地域がん登録データによる小児がんの集計」が最優秀賞に選ばれました。会場の都合もあり、講演会場の壁面に展示いたしましたが、市民の眼にも触れましたので、市民向けのポスターがあっても良かったかなとも思われました。

また、総会研究会初の試みとして、地域がん登録事業の意義を市民の皆様に周知する目的で市民公開講座を開催いたしました。会場の広さと時間的な制約もありましたが、87 名の市民、メディアの参加をいただくことができました。テーマは「がん医療は進んでいるのかーがん対策におけるがん登録の役割ー」としました。ご講演内容は「がん登録とは」（国立がんセンター 味木和喜子先生）、「がん医療と情報」（国立がんセンター 西本 寛先生）、「がん登録の利用ー胃癌予防の可能性ー」（山形県立中央病院 間部克裕先生）、「がん登録から見たがん対策の課題」（大阪府立成人病センター 大島 明先生）でした。会の冒頭には、座長の労をおとりいただきました神奈川県立がんセン